広島原爆とその後の一〇〇日（98・3・21）

井街　譲（昭4・理乙）

三十年余り前に私、兵庫県の眼科医報に「いのち」という随筆を書きました。それを見た学生が昭和三十六年に卒業して後、岩国で開業してる医者の息子なんですけども、岩国から通う間、いつも先生のことを思い出して、こんな小説を書きましたと言って、軍医少尉井街は何とか――と原爆に生き残った運のいいヤツやという生命拾いの話を、地方の文化雑誌に書いて呉れてあるんです。その雑誌を井垣君が見て、広島原爆その日からの苦労の事を一辺しゃべれという事で、今日のお話になりましたが、もう済んだことです。

『あゝ青春は今かゆく、暮るゝにはやき若き日の』と紀念祭の夜に、夢中になって歌って涙を流したのが丁度72年前の事で、私の三高入学一年の時です。私は兄弟三人、三人共陸上の選手で、兄とも弟とも5年離れた二男坊です。まあ、余り勉強しないで運動してた

んで運動部の方では、顔が効いたんですけれど、無事医学部を卒業して医者になりました。途端に之は大変だと気付きました。それまでグランドで過した時間は、毎日皆勤で北白川のグランドで走っておりましたので負けてませんが、勉強の方で他の同級生のヤツに負けては大変とそれから急に勉強に切り替えを始める事になりました。それなのに次の年の夏、京大陸上部の20数名の連中を連れて、満州鉄道と朝鮮鉄道の陸上の連中から試合を申込まれていたので、その監督として行ったのです。

私の一年先輩にとてもよい方がいて、その伊吹先輩は小遣いがないから、おれは家に帰るのは時間も無駄だし、しんどいと病院で無給の万年当直みたいにして非常によく勉強しており、その人が私をリードしてくれたんです。伊吹先輩について万年当直みたいに図書室で毎日夜半迄勉強していたら、やっぱり慣れぬ勉強をしたのがいけなかったのか、卒業して2年目の秋に酷い喀血をしました。その頃の結核というのは薬がなくて、陽の当るお座敷で、風通しよくして一乗寺の田舎の両親の家の二階で叡山を目の前に見乍ら療養をしていました。他の兄弟とご馳走を一緒に食べるんですけれども、一週間に鶏一匹ずつ余分にお前の分だという風にして、僕だけは余計に食わされたら、ある時期72キログラムまでに肥ったんです。それ迄学生の時は63キロだったのが、72キロ。そしたら私の妹が、にいさんはこの頃のら犬みたいに首が太くなったナと言ったんです。口の悪いのは私の家系、

全部そうですから仕様ありませんけれども、それを言われてから、少し運動をして食べるのを控えて、大体65キロで、ずーと非常に健康がもどって来ました。

私が結核で喀血した時なんかは、命令で絶対安静をさせられていました。一時は自分のお葬式が教会で行われていて、それを自分が二階から見てる夢なんかを見る程、すっかり悄気とったんですけども、ある時期になったらケロッと忘れた様に非常に元気になりました。元気になった頃は太平洋戦争が激しくなった昭和17年になって了ってました。京大医学部の第一回御卒業の小松初太郎先生と云う方が、神戸の県立病院の部長をしておられたんですが、その方が脳梗塞で半身不随になった。それでどうにも困るからお前来いと云われて、無理矢理引っぱられて神戸に赴任する話になりました。県病に採られた時、私の先生はそこにおられる盛君のお父上が医学部の眼科の教授で、それも来年停年というのを控えてられました。戦争中で若い医者がみんな戦争に引っ張られて人がなくなったのに、教授、その次の助教授の浅山さんは北京の中央病院へ無理矢理赴任させられて、そのあとの私は半病人という事になっておるのに、講師にされて残っておって、後はずっと若いのと女医さんが二、三人全部で十人もおらんかったです。で18年に困ると云ったんですが、やむなく県立病院の方に赴任しました。

この頃は神戸の県病も、京都も神戸にも町全体、男の医者がおらなくなって、女ばっか

りになっておったんですが、そういう状態なのに、兵庫県に赴任したら、それまでに広島陸軍病院から、3回召集令状が来ていたんですけども、喀血した証明書と、腎臓結石の写真を持って広島に行って、こんな者アカンと帰されて、即日帰郷命令に二度会っていたんですが、広島の方に私が県立病院の部長に呼ばれた事がわかってしまっていました。一方県立病院はもう人がいないからどういう風にして、医者を増やそうかと医学校を作る計画で医専を作ることにもう決ってしまっていて届けたのが、19年の1月15日ですけれども、その通知を見てか見ないでか、広島の西部軍の軍医部長の三浦少将が県病へ赴任するのなら採れって、私を広島の陸軍病院の眼科に見習士官として営内居住で、無理矢理引っぱり出され、召集されました。応召したのが19年1月の30日ですけども、学校は申請通りに4月23日に兵庫県立医学専門学校が設立されて、それが県立医大になって、それが今の神戸大になってしまっております。そういう所へ私がはまり込んで学校申請したのがとにかく広島に見つかって召集されて了いました。召集されたのは医者ではあるけども、将校としたら最低の少尉にもなれない見習士官、配置されたのは広島第一陸軍病院の第一病棟と第二病棟の主任みたいな所へつけられたんです。赴任させられて後、県病の方から困るから何とか返してくれという、嘆願状が出たらしいです。私、呼び出されて三浦少将に「おれがおる間は戦地には出さんから頼むからおってくれ、眼科がいないんじゃ」という話で、

広島陸軍病院の営内居住の見習士官として、歳40位のやつも込めて十何人が二階の部屋に居住して、夜昼なしに一生懸命勤務しました。そして病院で働く者のうちからもどんどん戦地に引っぱられていきました。

そうやって広島で過している間、私が19年の1月から20年4月1日まで営内居住の見習士官で、外に出ることは二週間に一辺、日曜にだけ外出出来るけれども、京都まで帰るというのは外泊許可が要りますしね。そういう苦労して暮してやっと20年4月に、営外居住が許される少尉に任官しました。任官した途端にこの地図で赤丸が付いてると思いますけども、太田川の支流の元安川の白島という橋の袂に丁度いい大きな材木問屋のおばさんの家の離れが空いていたので、借してもらってそこに家を持つことになったんです。

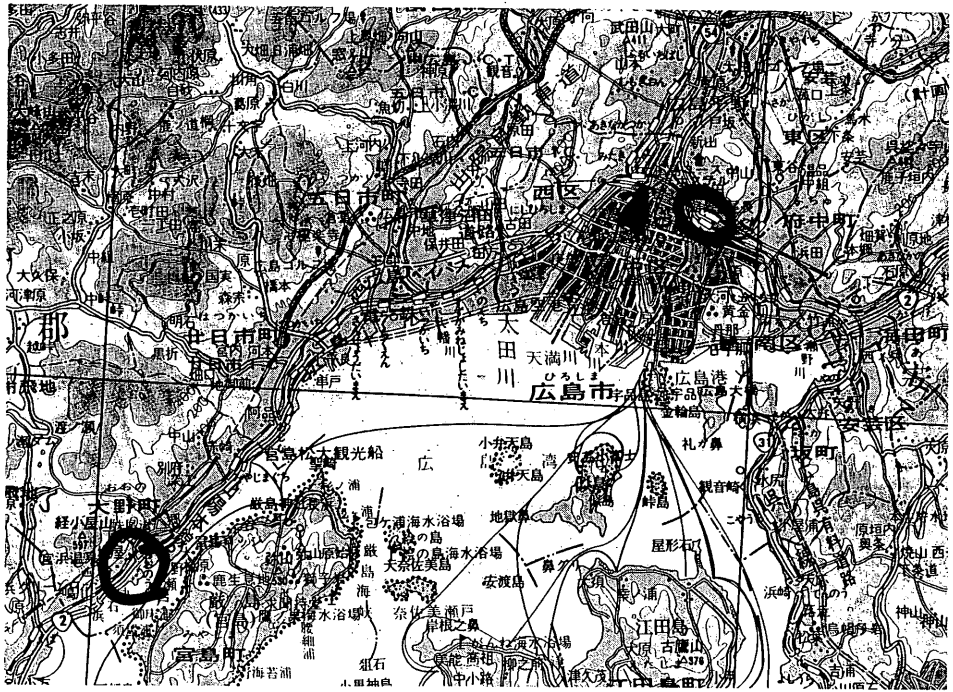
それまでに私は営内居住の時に、岩国の燃料廠空爆だとか呉の空爆とかの度に外科病棟眼科部長ですけれども、救急班長にされて50人位兵隊をつれて二台のトラックで救急に行ったんですけども、岩国の空爆というのは、燃料廠のタンク群を大爆撃されたんですが、全部、油のタンクですから全部燃えて、中で人間が逃げられずに一二〇人位が蒸焼きになりました。その蒸焼きになったのが近所の国民学校へドンドン運ばれて、皆、死体になって並んだのを見せられました。それから呉の工廠を空爆された時もみんな山の中腹に出来てた防空壕へ逃げ込んだまま、空気が足りず、下が燃えたので後からゾロゾロ死骸を運び

出して、やっぱりそこも一二〇人以上死んだ様です。

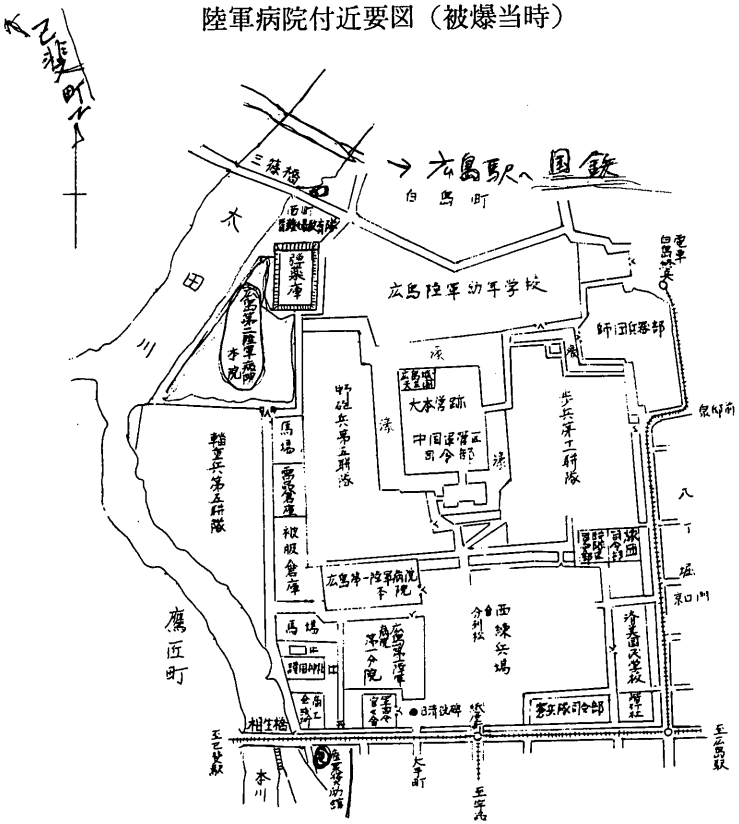
そんなの見て折角、白島大橋の際に、大きいお邸の離れを借りたけれども、すぐ裏が橋で二〇〇米北に鉄橋、元安川の鉄橋がありますから、これは危ないからと、危険を感じておったら、京大二年先輩の西川大尉が、五日市の自分の家の近所にいい空き家があるから借りてやると、楽々園の海岸辺りで、それは非常にいいお邸で新しくだれもおらんかったきれいな別荘みたいな家を借してもらったんです。いくらで借してもらったか何にも知りません。そこへ行ってそこから広島へ通うことになりました。ところが広島の陸軍病院と云うのは七〇〇人以上入っておったんですが、結核病棟だとか、レブラの病棟だとかそういう色んなものが混ざって、また別の所にもう役に立たないで、除隊命令を待っている兵役解除にされる様な、手がこんなのやら、顔がつぶれた人なんかが、百何十人おったのを4月頃から、どんどん他所へ疎開して私が営外居住で少尉になった頃に、丁度話が出来まして、五日市の天理教の教会と、それから本願寺の別院の本堂と、非常に立派な所でしたがその両方へ五十人づつ兵役免除予定の患者を移動、疎開させ、農耕隊、畑を耕やす隊というのを特別に編隊しました。私はそれは非常にいい事やと、それからそこは広島の分院ですからだれかが管理をしなければいけないと思っていました。それを私の下におった福本と云う衛生曹長が井街少尉は親父が農学関係の人だし、それから非常に好きだから、農

耕隊の監督にして上げて呉れと、そういう風に曹長が運動してくれたんです。それで私、農耕隊の監督みたいな恰好で、週に二度づつそこへ行く事にして、五日市から広島へ通っておりました。広島から通うのは、まあ電車で行ったら30分余りで十キロ位ですね。だからすぐなんですけども、そういう所へ通うことになり白島を逃げて、楽々園の海岸にいいお家をもらった訳です。週に二度は農耕隊。農耕隊というのは芋の苗を植えたり、ホーレン草や三つ葉植えたりして、お百姓さんをさして食糧の手助けをしてくれる。陸軍病院の連中も喜んで働いて、お芋が食えるから喜んでおりましたが、その監督に私、行っていたんです。そこへ通うのは電車があったから簡単です。丁度、原爆の一ヶ月前。五日市の海岸に7月10日に移って8月6日に原爆に会ったことになります。8時ちょっと前に家を出て農耕隊を見てから病院の方へ、広島陸軍病院へ顔を出す。そういう予定で週に二度づつ通いました。私の家からは1キロ位北に競馬場の予定地があって、それと造幣局の広い空き地があって、それを一〇〇人の兵隊で苗を植えて芋をこしらえ始めておって、7月・8月は芋がもう取れ始めていました。

原爆の日の朝も八時前に家を出て農耕隊の近くまで行ったら、突然、ものすごい光がピカッと右の方で光ったんで、すぐに伏せをして、田んぼの中へ頸(くび)をつっ込んで右を見てたんです。そして私、陸上選手ですからものを見たら、即座に、2・3・4と秒数かぞえ出


広島市
太田川
天満川
広島港
宇品
広島大橋
西区
東区
中区
南区
安芸区
坂町
観光船
宮島
厳島
大聖院
大鳥居
地獄鼻
観音崎
屋形石
江田島
古鷹山
大原
海水浴場
大奈佐美島
安渡島
奈佐美瀬戸
岸根之鼻
中小路
狐石
海若浦
宮島町
大野町
廿日市
宮内
阿品
小舟天島
天島
礼ヶ鼻
浜崎
原田
観音崎
広島大橋

陸軍病院付近要図（被爆当時）



広島市原爆戦災調査室資料の一部借用

したんですね。そしたらワァーと物すごい光、その後、ウォーと東の方一面に全部もく〳〵もく〳〵と白い煙が出て、その真中からものすごいきのこ雲がオォーと出て、丁度30秒位の時にものすごい爆風で、なぎ倒されました。私が倒れてこうやって見てたら、なぎ倒す様な風が来て、稲なんかみんななぎ倒されたんですけどね、そういうのが30秒だから、音速で十キロですね。10キロ・広島だな。東方の山の陰に見えておりましたのが、広島のどの辺りまでというか、広い範囲が真赤に焼けて、ドンドン〳〵煙が流れてきて、結局、広島の全体がやられたのがわかったんです。その八時六分でしたけれども、すぐかけ込んで五日市の天理教の事務所へ行って衛生兵二人と看護婦二人連れて、5人でおにぎりを3つづつ作って、海苔で巻いたおにぎり3食分と水筒を皆、腰につけてすぐに出かけた。私をこっちへ呼んでくれた西川大尉の家へ、『大尉がどうしてられるかわからんけども、広島まで行ってくる』とちょっと挨拶、連絡に行って九時半に出たと思います。

それから一生懸命走って〳〵古江の町を通って広島の中心はまだ燃え盛ってるので、己斐の町から北側を通って鉄橋を渡る事にして走りました。とても熱気が酷くて渡れなかった。そういう風にして鉄橋を渡る頃にはどん〳〵どん〳〵広島の焼けた所の人で生き残った人が、ほとんど着た物も焼けてボロ〳〵になって一生虚命西へ西へと流れてくる。それを見ながら私らの五人、一生懸命走って己斐の鉄橋を二つ渡りましたけども、その鉄橋へ

来るまでにドシャ降りになって、体中びしょびしょになる位、にわか雨が降ったんですが、町へ行くとまだ町の熱気でカッカッして燃えてるんです。そういう所へ走り込んだ途端にカラッとすっかり乾いてしまいました。鉄橋はまだ油のついた鉄橋の桁なんかが、ポロ〳〵炎を出してる所を通り過ぎ、連れてった看護婦なんかは、怖がってオイオイ泣くのを、しっかりせんかいとどなりながら、その橋を渡って鉄橋の二〇〇米下の白島大橋の下までやって来たら、そこには広島陸軍病院の、私の上官の軍医殿ですね、木谷大佐だとか、吉田少佐だとか、そういう教育隊長だとかがズラーと河原で並んでゴザの上に15～16人寝てました。そして前の連中は、上流に可部とか、翠町とか、町があるんですがそこの国民小学校に和船で十人位づつ、どん〳〵運んで、上の方の学校へ疎開させているのでした。そういう所へ丁度、行きついたら、更井少佐といって、私より5年か6年下の京大卒ですが、現役ですから少佐になっておるんです。私がオーと顔見に行ったら〝井街少尉　水くれー〟と泣き声出して、私は水筒の水を何人かに飲まして、四人連れてますから、ガンバレよと声をかけて進みました。町の中は通れないんで川に添って、太田川の堤防の下に添うて川原を伝わって歩兵第二連隊とかを通り過ぎました。お配りしてある地図の赤丸の付いてる所が僕らの広島の病院、それから原爆の中心にもマークしてあります。も一つのは陸軍病院ので、もう少し詳しいことが書いてあると思いますけども、とにかく川辺りを伝わ

って行く時に、未だ川へはね飛ばされて上ることも何も出来ない馬が一匹、フラフラになってるのを見たり、それからもう川にはポカポカ原爆で死んだ魚が一ぱい浮いておる。それを一生懸命わけて〳〵行って、僕がおった第二病棟のそばの娯楽室の跡辺りまでたどり着いて、川原へ上ったんです。

陸軍病院そのものは全部焼けてしまって、まだ熱気はあるけども堤防にあった娯楽室なんかは跡形もなくなって、それから大きい鶴やなんか入れてあったゲージまでが、ふっとんでつぶれていて、こんな太さ30センチほどの樫の木があったのが、何本も堤防の陰になった1メートル半位の所でボッキリ折れて焼けちゃっていました。そういう所へたどり着いたら、生き残っておった私の病棟の生駒婦長だとか、隣の病棟の新宅婦長だとか、看護婦の何人かがおりましたし、衛生兵だとか患者なんかがウロ〳〵しておる。それが12時半に向うに着いた時です。私は原爆の瞬間に助かったので、まあ、生命拾いをして、生命なんて本当は考えてもいなかったんですが、一生懸命、体の表面が焼けてドロ〳〵になったのとか、そういうのがドン〳〵運ばれて来るのを川原に、ずーとトタンの上に筵を敷いたのを並べて、ドン〳〵ドン〳〵収容してはテント張りました。その資材は船舶部隊という部隊の兵隊が次々と運んで来るのです。夕方頃には、そういうのが20・30人寝かされた。それを命令をして町のどこの病院、日赤だとか、逓信病院は残ってるけど、福屋の6階建

か7階建の鉄筋は全部ガランドウになってコンクリートのうつろだけになっている。そういう所へドン〳〵指令をして運び込む。やっと、他の遠くの町へも元気さによって区分けするんですけども、そういうのをぢかに診て、私はその晩と次の晩は川原で筵を敷いて寝ました。川原の縁、堤防の木は全部焼けてしまって、病院から見渡す限りの周りの山々も赤膚になってるんですけども、そういう所で一晩・二晩過したんです。潮が満ちて来たらポカ〳〵ポカ〳〵材木、こんな太さ50糎以上もある大きい長い材木がウァーと流れて上るのと一緒に人間の死骸が幾つも幾つも流れてるんです。

そのうちにどこからともなく裸の兵隊が二人船をこいでやって来て、縄をかけて死骸をみんな船に乗せて、それを川原へ持って上って川原に別の船舶部隊の連中がこんな10米もありそうな太い材木の長いのを何本も重ねて、その上に死骸をどん〳〵乗せて、10体位のせたら、又、上に材木のせて、また10体位のせてそういうのに油をかけて焼いて始末を始めたんです。そういうのが初日の夕方、次の日は3ヶ所か4ヶ所になりましたけども、ずーとうちの部隊、うちの部隊というのは原爆ドームのある中心から8百メーターから1キロの間なんですけども、その川原にそういう材木置き場を作って焼いておるのでした。ドン〳〵ドン〳〵体がくずれて焼けてる、浮いてきた死骸、それを積み重ねては油かけて燃やします。片方、やっぱり川原に食糧を沢山積み上げてあったのが、それに火がついて焼

けてるのを、井戸水汲んで来た看護婦や何かがドン〳〵水かけて消したり、そういうのもあるし、まあ非常に忙しい日を何日か過したのです。一日に40人としても死体の火葬は15・16日位まで続いたでしょうか。

また、そのうちに、一緒に陸軍病院で働いていた連中が、昨日まで元気にしていたのが、次の日にはぽっと来なくなった。それは例えば、朝、歯を磨いたら歯茎から血が出て来たとか、下血をして一日位で死んでしまうんです。そういうのが、14・15日位になったら死ぬ方が多い位、運ばれて来てはすぐに死んだとか、他へ送られて死んだ。僕は最初に白島の大橋の下で私を見つけて水をくれと云った木谷大佐とか、更井少佐、そういう方達を病院から何キロか上の翠町という所の、小学校に収容されて居られたので、10日目位に、私は暇を見つけて、そこまで駆け付けて見舞に行ったら、もう小学校の講堂に祭壇が出来ていまして、一番上の段に木谷大佐、それから次の段に更井少佐が並んでね。30人ぐらいいったのが皆、向うで焼かれ、位牌になってられた。そういう状態で大体、死ぬ方は二週間で死んだのが非常に多いと思います。

その頃の事はこの写真をちょっと見て頂きたいと思います。原爆の調査館・戦災記念館があるんですが、そこの小堺さんという方から頼まれて生き残ってる連中がいろいろ分担して原稿を書かされたのが集められ、私の原稿も入ってますけども、原爆資料館にうーん

とこさ沢山の写真が出てます。その写真の一部が印刷になったのを、今日は持って来ておりますけども、恐らく普通の人だったら、肝つぶす様な体半分ドロ〳〵のがドン〳〵ドン〳〵運ばれて来ました。

私は原爆当日の六日の日にかけつけて、七日の日に、とにかく生き残っておった兵隊と一緒に防空壕をずーと探し廻ったんです。だれか生きてるかも知れない。原爆のあと二日目の夕方に見つけ出した村岡曹長—衛生曹長ですがそれが、半分死んだ状態でおったのを引き出して来て、大八車で、八日の日に五日市の天理教教会収容分院まで連れて帰りました。そのダメだと思ったのが生きのびて元気になりました。前に船舶部隊におった人で、何か縁故があって姫路の沖にある家島の旅館の人に頼んで、そこへ住み込んでおったんですね。元気をとり戻して家島の人になってしまって、とう〳〵家島汽船に就職して重役さんになって数年前、平成五年位まで生きておられました。それはもう明らかに白血球が二〜三千という非常に少なくなっておったのが、そんなんでも助かって余生というのかなー、平成五年に亡くなったとしても。

も一人、私の直属上官ですが私よりも四歳も若い少佐殿で、北大医学部を出た現役軍医さんですが、それが私が見舞に行った九月始め頃、可部と云う町の民家を借り上げて衛生兵がついて、お家の方も一生懸命世話してくれていたんですが、その吉田という少佐が丁

度私が見舞に行った時に、枕元に半熟卵を二つ、その頃半熟卵二つなんて食べられる人ほとんどだれもおらんかったと思うんですが、それと真白なおかゆが置いてあるのに、吉田少佐は私が見舞に行ったら「シイサン（先生は中国語）おれはもうダメだ」って云うんですね。それで「何云ってるんだ、食べなきゃあダメだ」って。

私丁度、その二週間程前の8月の17・18日頃ですか、杉山教授って京大の病理の教授が広島に来られて、牛田小学校の庭で、原爆で亡くなった人の解剖をやってらしたんです。私は横で見ていました。ずーと貧血がひどくて死んだんですけども、大腿骨をたてに切ったら普通は、40をこえると黄色骨髄と云って骨髄が脂肪変性して黄色になってるんですのに、その40過ぎた男だと思うのが、骨髄が非常に充血して赤くなってる。そのことを杉山先生が「あれェ、これ、ひょっとしたら、頑張ったら骨髄が、また働き出して血液を作るんだぞ」とこうおっしゃったんです。

そういう事を聞いてたから「吉田少佐、それ食べなきぁだめだ。こうこうだからね、血液を作るのに蛋白が要るんだから食べなきぁいかん」と云ったら「そうかァ、助かるかー」て吉田少佐起き上ってね、おかゆを食べた。「おかゆじゃなしに卵も食え」と云ったら、半熟の卵を食べた。そしたらそれが丁度うまく転起になったのでしょう。その吉田少佐は僕が行った前に、血液検査で白血球、八千あるのが普通なんですけども、千をきれて

おったんです。危篤電報打って、北海道のりんごで有名な余市の人です。白血球が九百でした。それでおれはもうダメだと云ったのです。喝を入れたら一生懸命食べだした。それが転起になって、食欲が出て結局八百か九百まで下った白血球が、どん〳〵増えてきて、12月になってから北海道からお迎えが来て、一緒に連れて帰られ、一まず札幌の陸軍病院の後の病院にしばらく入院して、それからしばらくしてから余市で開業されてました。それで平成5・6年頃まで非常に元気になって生き返っておられます。そういう風に、ある程度、越えたら生きのびられるんです。吉田少佐はとにかく非常にいい男でしたし、私は仲良くしておったんですけども、原爆症でもう本当に死ぬつもりでおったのが、2年目か3年目に電話か手紙で女の子が出来たって、電話でね「先生（シーサン）（中国語）オレのザーメンは強いぞ」ってこう云ったんです。だから原爆症になってあんなに死ぬ思いをする程の貧血があったのに、生きのびて女の子ばかり、その後、六人か出来たんですね。そういう風なこともありました。

とにかく片っぱしから、一緒におった看護婦やなんかも、どん〳〵どん〳〵死んで、大体原爆の10日目位にギブアップした方が非常に多かったです。生きのびたのは何かの具合で、うまく生きのびた。それから被爆した人でも、光の受け方で陰で受けたのと、直射され火傷しても、表面だけの人とか、条件が皆んな違うし、人それぞれに死に方も違った様

です。私、知ってるだけでも生きのびたのが、かなりおります。僕が丁度、家を紹介して頂いた西川大尉、昭和六年医学部を出て、二年先輩ですけども、あぶないからと白島から五日市の楽々園へ、家を探してもらったんですが、その西川大尉は内科の部長さんでしたけども、その頃、兵役をまぬがれて開業医か勤務医でした。42歳以上で召集洩れでおった人がかなりおったんですが、懲罰召集みたいに教育召集されましたし、年とって病気で生きのびておった、あるいは上手に生きのびておった人もおったんです。西川大尉が監督で予備軍・予備員特別召集みたいなのがありまして一二八人が呼び出されて、広島の陸軍病院の大きい空いた病棟へ合宿させられておったので、西川大尉はその総監督の隊長でした。その西川先輩を探してくれと奥さんに云われて、私は仕事の合い間に行ってみたら、そこら全部、焼け野原で何にもないんです。西川大尉のおった場所もちゃんとわかっておる。それから一二〇何人、八時だから野外で訓話かなんかしておって、爆風で直撃され吹きとばされたか、焼けて死んだか、だれも残っておらなかったです。西川大尉の部屋に行って何か遺骨でもあればと思って行ったら、部屋も何にもない、本当に、更地みたいながらんどうの焼け跡。私はメランジュールと云って、ご存知ないでしょうが、血球計算検査の時に使うガラスの器具ですね。それを西川大尉のおった部屋のあたりで、それでも記念にと思って、メランジュールの溶けたガラスの固りを箱に入れて持って帰って、骨も何にもな

いって、奥さんにそれをお渡ししたことがあります。

とにかく瞬間にあとかたもなく消えて了った様に死ぬって云うことが、何でもなくなっちゃうんです。私が一緒におった二号病棟、それも跡方なしにとは云えないですが、焼けてしまったんですが、窓わくだけが残っておる。窓わくの所に頭が下になって骨になっておる。灰になってお腹の下腹部だけが窓わくにはさまれて、黒く固まって見えておって、彼は全部灰になっちゃった。それが私いつも一緒におった小野田士官（岡大卒）、耳鼻科の先生ですが、この人だと思います。いつも私も、その部屋で仕事をしていたんですけども、その日は楽々園におったからその瞬間は小野田さんがおって、そういう風な骨を残した。骨の下腹部だけが黒く残っておって、小野田さんだろうという、そういう風な亡くなり方でした。

だからどういう運命で、うまく助かるやつもあるし、生命って何だろうと、そういう風に思い乍ら、一生懸命働いて、後始末をして本当に八月の終り頃になりましたら、貧血がどん〳〵どん〳〵ひどい。それから僕のおった病棟のすぐ西側に、5坪位の池があったんですね。その池の所にやっぱり熱くてたまらんので誰かとび込んだ兵隊があったんです。二日目に浮き上って私が行って、上向けたら、目玉が五センチ直径位に膨化して眼窩からとび出て紫色に腐敗している、夏の熱で膨化して、破れもせずに、こんな目玉が紫色に焼

け、ブクブクにふくれた体と一緒に浮いて来た。そういうのもどん〳〵運び出して火葬しました。

だれが死ぬか、だれが生きるか、本当に神様がなさるんでしょうけども、まあ運命だと思います。広島陸軍病院てのはこの図でご覧になって、おわかりにならんかも知れませんけども、広島の太田川という非常に大きい川ですけども、川下が幾つも分れておる。僕のおったのは元安川という川っ辺りに陸軍病院が、ずらーと並んでおって、その一番南の端の方に見習士官室、そこに住んでおって、一号病棟・二号病棟もその近くにあったんですが、そういう所で働いて、この陸軍病院の端の方に僕は住んで、ここで一年二ヶ月を太田川で魚を見ながら過していたんです。

原爆のドームがあるのはここです。直線で8百メートル位です。まわりの幼年学校の兵隊だとか、少年兵だとか、二聯隊の兵隊だとかどん〳〵運ばれて来て死んだのも一杯ありました。それから大体私が見習士官をしてた時に真東に大きい広島城があったのが、瞬間に何にもなしに、吹き飛んで潰れてしまった。参謀本部なんか大本営があった所は、お城の中にあったんですけども、それがつぶれて地下壕と、それから広島駅の西側にあった山の中腹に出来た防空壕に、みんな疎開してしまって、広島のこの辺なんか全部焼け野原です。そんな所で死骸の世話ばかり。病気の世話など、じかにはとても出来る程、余裕はな

くて、どん〳〵送る命令ばかり出しておりました。そんなことしている間にどん〳〵どん〳〵貧血がひどくなって、昨日、元気だったヤツが死んだよと。こういう、ひどい出血死ですね。下痢をして出血をしたとか、ポロッと死ぬ。そこにおられる百々君なんかは、その後をうんと診ておられると思いますけども、生き延びた人もおられるんです。白血球が九百あるいは八百てのが、吉田少佐みたいに生きのびて、80いくつまで生き永らえ、兎に角、平成5年まで生きておったです。

どん〳〵貧血しておる。どうしていいかわからない。軍医部でも困りきってどうしていいかわからない。どうしたらいいだろうと軍医部の部長、それから駒田少将と云う原爆のあと来られた方とか、それから広島の軍医が逝くなったので松江、鳥取部隊から終戦後、五日市に補塡して貰って、本部が焼けたので五日市に本拠を移したんです。五日市の西部軍の軍医部に行ったら全く奇遇とも云える福家大尉と川上大尉が転任して来ておって、井街、よう生きておったなァと云ってくれてね。この二人の大尉は京大医昭8年卒の同級生です。ところが、駒田閣下から、どうしたらいいだろう、血液の大家を何とかして連れて来なあかん。血液の大家って云うのは、とにかく今は貧血を調べるだけで一杯ですから―、恐らく輸血するより他ないんですけれども、輸血する様な余裕はない。それならどうしたらいいだろう。血液の研究班をだれに頼んだらいいだろうと駒田さんが云われたんです。

そしたら勝沼先生と名古屋の先生と京都の天野重安先生が、血液学だったら一番だ。勝沼さんなんかはどうだろうねェ、と云って、結局、川上大尉が天野重安さんていうのは非常にいいけど、気難しい。井街は天野さんの所で仕事してて天野先生に気に入られてるから、井街を頼みに行かしたら何とか来て貰えるよ、と云ったんです。

それで「お前行け」って8月25日に云われたんかナ。それで、「26日にすぐ行け」って、で、26日朝、出発して、とにかく広島から「広島の原爆調査隊を、血液研究を主にして派遣して下さい」そういうことをお願いに参りましたっていう風に京大へ報告に行くことになったんです。そして、まだ、京都のだれも僕が生きてるなんて思ってません。とにかく、親父に顔を見せないといけないと思って、朝早く出て汽車が夕方京都に着いてすぐ、一乗寺の親父の家へ行こうと思って歩いていたら、同級生で後に教授になりましたが、稲本君てのが、京大におったんですが、バッタリ賀茂の大橋の所で自転車に乗ってきて、会うた。そしたら稲本が「おゝ」って、私はまだ軍服ですからすぐわかって「おゝ、井街！　お前、生きとったんか」「あゝ、うれしい」と云ってくれたんです。いいやつが、皆、死んだなァと云われた。本当に、まれな生き方をしたってほめてくれました。家へ帰ったら、勿論、親父はお前生きててくれたんかと、喜んでくれたんですが。そんな風に、ベリーレアーな生き方をしてもどって来て、次の日に大学にお願いに行って、天野先生に先ず、報告をし

て「先生、調査隊を作って下さい」とおねがいした。そしたら杉山教授と、それから病理の教授にすぐ報告をして、それから真下教授にも連絡をして調査隊を作ることもお願いをして決めるからと、そういう風な話をして、次の日に、私は広島へ引き返した。真下先生とか杉山先生だとか、32人にお願いをして9月3日か4日にお出でになって頂く時間まで打ち合せて帰ったんです。私はとにかく、広島から無事に一人で京都に行き翌日五日市の家まで帰りました。

この広島の原爆調査隊って云うのは結局32人が集って入れ代り立ち代り来られたんですが、一度に広島へ来られても宿舎がないので、京大先輩の現役の斯林(シバヤシ)大佐が大野浦陸軍病院の院長しておられて、副院長が私の一級上の水野大尉。その大尉のおられる大野浦という、五日市がここにあって、大野浦ってここにありますが、その玉石っていう下に玉石浜って書いてありますね。その辺は大きい、一メーター位の岩がゴロ〳〵してるんですね。そのゴロ〳〵していることを後から聞いたんですが、90何年前に、そこらやっぱり山崩れで大きい岩が、みんな山からころがり落ちた。それが浜に集ったのが玉石なんです。私なんかそんな事、知らずにそこを根拠点にして、五日市の陸軍病院の患者を、元赤十字病院だった大野浦のそこにどん〳〵送り込んで多い時には八〇〇人位も入ってました。それを更に越えた場合は、その近所の国民学校に移しましたけれども、そういう風な恰好で、七

〜八〇〇人収容した。血液の調査班をそこに配属して病院の前の宿に10何人、それからも一つ別の所に10何人という風に、宿泊所まで決め、病院でも隊員が寝泊り出来る様にしておったんです。

その後はもうつけ足しになりますけど、原爆の調査班を配属したまで、私は責任があって調査班の接待将校の大将になりました。杉山先生・真下先生、それから今生きてる方も大勢居られますけども、30何人連れて来たのを大野浦の陸軍病院で接待をして、研究をして頂いておる時に、16日の夜中に枕崎台風ってひどい台風がありました。その頃、ラジオの放送もテレビもありませんし聞かなかったですけども、15日の夕方、先生達の観迎会を院長さんと副院長さん方と一緒に先生方、十何人で浜で取れた鯛やら、それからいろんな魚をうーんとご馳走しました。何年ぶりだろうこんな魚食べたのはと云って先生達は非常に喜ばれたんです。その後、だれか広島に帰る人はいないかって、トラックが広島に帰るからって呼びに来た兵隊がおりまして、「おれ、二日家に帰ってないから一ぺん帰る」と私はトラックの端っこに乗せてもらいました。五日市で降ろしてもらって五日市街道から家へ歩いて帰るの簡単ですから無事家に帰りつきました。

そしたら、その晩から雨が、どん〳〵降りましてね、15日・16日はどしゃ降りで知らなかったんですが宮島電車は不通になっちゃったんです。で大野浦へ行けないから、家でゴ

ロ〳〵して、それから五日市に軍医部の司令部が引越して来てますからそこへ行って話をしてたら、十六日が過ぎて十七日の朝、伝令の兵士が走って来たんです。宮島電車、鉄道も全部、枕崎台風で流れてしまって、鉄道の上なんか1メートル位、砂がかぶさった。それから七〇〇人おった大野浦の赤十字跡の陸軍病院のど真中を土石流というんですが、山崩れで全部流されて建物は海岸まで、ごっそり真中をぬかれて原爆症患者が一九〇人亡くなってるんです。私のお願いして来て頂いた京大原爆調査隊では30何人の内、12人も水害で亡くなった。私はその時も何んで助かったんだろうと思う位、たま〳〵〝帰る人ないかぁ〟って云われたんで〝おい、乗る〟と云ってとび乗って帰ったので、その次の日の雨にも遭わずに、17日の朝、伝令が来て、お昼前に報告を聞いて軍医部の駒田少将とか川上とか、僕の知ってる軍医と一緒に宮島まで車で走って、それから宮島から小船で大野浦まで、ポンポン船で行って、やっと水害の跡を見ました。その時は、すでに真下先生は顔を怪我されて包帯した御遺体が安置されていましたし、他の人も。死骸が発掘出来ないのもおりましたが、海に一八〇人以上流れたんです。杉山先生は、私共の習った京大病理の先生ですが、宿舎へ帰って寝かされて居られて、私が御休みの所へ伺って、先生にお見舞を申しましたが、耳がよく聞えない。だれか耳鼻科の医者を探してくれって云われて、見習士官で耳鼻科の軍医を連れて行って、先生の耳を診て貰ったら、片方の耳に砂が一杯つまって

て、建物と一緒に流れて海へつっこんで怪我され、耳に砂がつまってる。砂を洗い出したらジクジクとリコロエ脳脊髄液が出て来る。脳底骨折があったんです。それですぐ呉の海軍病院へ、杉山先生のお弟子だった人が軍医でおりましたから、頭蓋底骨折として御願いして移され、それから二週間後に脳膜炎みたいになられて、杉山先生は僕が京都へ帰ってから、亡くなられた連絡をもらいました。だから京大の方々、30何人来て頂いて、名前もわかっておりますけど、12人亡くなった。それから広島の陸軍病院で一緒に働いておった人は、数年前までは、5・6人は連絡がありましたけど、今はほとんどないと思います。

それから、ちょっと長くなり過ぎますが、私は本当は、ちゃんとした、こういうスライドがあったらいいと思ったんですが、毎日々々焼いた人の骨なんか、こんな風に河原や畑で野焼きにされておったんです。死骸・骸骨ばっかり、それから火傷した人の写真が、べったり集めてあるんです。きのこ雲やなんか全部集まっておりますけどね。これ本当は焼けただれたドロ〳〵になった体、それから背中なんか、本当に焼けてしまって、こんなのが生き長らえておられても大変ですけども、かなり長生きされた方もあります。まあ、これをみんなに回したら気持悪いと云われるだけだと思いますけども、こんなの今でも顔半分ケロイドになって助かっている人もあります。結局、放射線で骨髄までひどくやられたら、もうそれはアウト。まあ何とか助かった方もありますけども、まあ惨憺たる——もう、

原爆なんか使う戦争は、やってもらいたくない。

この頃、パキスタンとか中国だとかは、まだねらって原爆を考えておるのだと思いますけども、本当に、本当にこわい。こんな縞のユカタ着てる人が、黒い所だけが焼けただれて、背中にきれいな紋がつく。それから軍医なんかで私が一緒におった方なんか、もうボロ〳〵の服を着て、気が狂ったみたいに走り廻っているのを見ました。又私が広島で住んでおった楽々園の家を引き上げた後に、伊藤って子が、広島で焼かれて家がないから、たま〳〵私の後に入ったのがおったんですが、偶々神戸医大に入って、37・38年位に卒業して医者になりましたが、顔半面にひどいケロイドが出来ていて、伊藤のアトムという仇名がついていたのですが、そのアトム君は、後で聞いたんですが、どこで被爆したと聞いたら、楽々園って云う。よく聞いたら、私のいた後へとにかく家がないから入った。それが広島の高校を出てから神戸大の学生になれて卒業したんですけども、結局、この原爆の後のケロイドと関係なしに癌で死んでいます。癌が起ったことが原爆と関係があるかどうか、わかりませんけども、まあ非常に戦争というものは、不幸なもので、かわいそうに無差別にやられます。戦争があったら困りますので、この写真を本当はこわいから見せて、又見て頂きたいと思う位です。顔なんかドロ〳〵になって運び込まれて来て、顔でも触ったら出血する。そして次の日に下血して死んでしまう。歯を磨いたら、ドロ〳〵血が出て来る。

血餅（ケッペイ）と云って真赤に皮膚に血が固まってくる。除けたら、又、血が出る。そういう様にもう、助かり様のない死に方をした人を何十人、何百人か、わからん位、診せてもらいました。

余り、長くなりますから、この辺でお話終ります。よろしいか。

尚、私は陸軍病院の河原や町の周辺の到る所で死体を焼いていた時のあの嫌な匂い、あれが鼻について「俺はもう塩鯖の焼いたのは一生喰いたくない」と思った事を申し添えて憶い出話の結びとします。

（神戸大学名誉教授・兵庫医科大学名誉教授）